

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 367 号	氏 名	織田 良正
<p>[論文題名]</p> <p>Effects of Caregiver's Gender or Distance Between Caregiver and Patient's Home on Home Discharge from Hospital in 285 Patients Aged ≥ 75 Years in Japan</p> <p>Medical Science Monitor, 29, e939202, 2023</p> <p>著者名 織田良正、香月尚子、多胡雅毅、平田理紗、神代 修、西山雅則、織田正道、山下秀一</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】超高齢社会である日本では、入院中の高齢者が自宅へ退院できない場合も多い。本研究は、75歳以上の入院患者のうち、別の医療機関への転院や介護療養施設への入所をせずに、自宅へ退院する患者に関連する因子を明らかにすることを目的とした。</p> <p>【方法】対象期間(2年間)に急性期病院へ入院した75歳以上の患者を対象に、単施設前向きコホート研究を実施した。患者を、退院後30日間自宅に居住したか30日までに自宅で死亡した患者と、それ以外の2群に分けた。診療録、患者、介護者に行ったアンケートからデータを得た。単変量解析で2群間に有意差があった各因子について、自宅からの入院、独居でない、認知度、バーセルインデックスを調整した多変量解析を行った。</p> <p>【結果】285名が本研究に参加し、年齢の中央値86歳、女性58%であった。多変量解析では、介護保険や訪問サービスの費用について知識が少ない、入院期間が短い、患者と介護者の自宅が近い、介護者が女性、余命半年以上が自宅への退院と関連した($P < 0.05$)。</p> <p>【考察】介護保険や訪問サービスの情報提供は、患者や介護者の生活の質を高める可能性がある。患者の自宅が遠い介護者や男性の介護者に対する、介護負担を軽減するサービスの情報提供は、自宅への退院を促進する可能性がある。</p> <p>【結論】介護者が男性であること、介護者と患者の自宅が遠いことは、75歳以上の患者の自宅への退院を妨げる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 368 号	氏 名	池田 宗平
<p>[論文題名]</p> <p>Harboring Cnm-expressing <i>Streptococcus mutans</i> in the oral cavity relates to both deep and lobar cerebral microbleeds</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 European Journal of Neurology. doi: 10.1111/ene.15720. 2023</p> <p>著者名 池田宗平、齊藤聡、細木聡、殿村修一、山本由美、池之内初、石山浩之、田中智貴、服部頼都、Robert P. Friedland、Roxana O. Carare、栗山長門、薬師寺祐介、原英夫、古賀政利、豊田一則、野村良太、竹上未紗、仲野和彦、猪原匡史</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】齧蝕の主要な原因菌である <i>Streptococcus mutans</i> (<i>S. mutans</i>)のうち、Cnmタンパクを発現する、<i>cnm</i> 遺伝子を有する <i>S. mutans</i> (<i>cnm</i> 陽性 <i>S. mutans</i>)と微小出血の関連について検討した。</p> <p>【方法】2014 年から 2018 年に脳卒中で入院した症例のうち <i>cnm</i> 陽性 <i>S. mutans</i> の保有を調べた症例を対象とした。微小出血は、全脳、深部、皮質下、テント下の領域で評価した。<i>cnm</i> 陽性 <i>S. mutans</i> の有無と微小出血の数、特に 10 個以上の微小出血の有無との関連をそれぞれ検討した。</p> <p>【結果】解析対象は <i>cnm</i> 陽性群が 72 人で、<i>cnm</i> 陰性群が 250 人であった。<i>cnm</i> 陽性 <i>S. mutans</i> 保有は、全脳領域における 10 個以上の微小出血の存在と関連した。また、深部および皮質下領域においてより多い数の微小出血と有意に関連した。</p> <p>【考察】本研究は <i>cnm</i> 陽性 <i>S. mutans</i> の保有と、認知障害の独立した予測因子である皮質下の微小出血との強い関連性を示した。<i>cnm</i> 陽性 <i>S. mutans</i> は、加齢や高血圧等で障害された脳血管へ接着し、炎症反応を惹起することで、微小出血発症に関与すると想定される。</p> <p>【結論】<i>cnm</i> 陽性 <i>S. mutans</i> は、深部および皮質下のより多い数の微小出血と関連した。口腔内の <i>cnm</i> 陽性 <i>S. mutans</i> を減少させることは、脳卒中患者の予後を改善するための治療アプローチになりうる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報 告 番 号 甲 ・ 乙	第 369 号	氏 名	宮原 尚文
<p>[論文題名]</p> <p>Is the Preoperative Prognostic Nutritional Index a Useful Marker for the Decision to Perform Limited Resection in High-risk Patients With Stage I Non-small Cell Lung Cancer?</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Anticancer Research 43(8):3659-3664. 2023 Aug.</p> <p>著者名 Miyahara Naofumi, Hiratsuka Masafumi, Okamoto Yusuke, Teishikata Takashi, Kamohara Keiji.</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的 : Stage I 期非小細胞肺癌 (NSCLC) の高リスク患者における縮小手術の適応については、依然として議論の余地がある。本研究の目的は、縮小手術を受けた高リスク患者に対して術前の Prognostic nutritional index (PNI) が予後へ与える影響を評価することである。</p> <p>方法 : 2005 年から 2020 年までに当施設で Stage I 期 NSCLC に対して縮小切除を受けた高リスク患者をレトロスペクティブに検討した。臨床病期/病理病期における上皮内癌/微小浸潤癌および多発肺癌の患者は除外した。術後合併症や死因の調査を行い、多変量の Cox 回帰分析を行い、overall survival (OS)に関連する因子を同定した。</p> <p>結果 : 適格患者 90 人が本研究に組み入れられた。グレード 2 以上の術後合併症は低 PNI 群で有意に多かった (6 例、16.6% vs 7 例、12.9% ; p=0.03)。また他病死は、低 PNI 群が高 PNI 群より有意に高かった (14 例、50.0% vs 11 例、25.0% ; p=0.002)。多変量解析の結果、男性 (Hazard ratio (HR): 4.15, 95% Confidence interval (CI): 1.49-11.4)、brinkman index \geq 400 (HR: 4.61, 95%CI: 1.43-15.8)、術前低 PNI(HR: 4.8, 95%CI: 1.87-12.3)、病理学的 T 因子 \geq T1c(4.73, 95%CI: 1.92-11.6)が OS の独立した予後不良因子であった。</p> <p>考察 : 術前 PNI 低値は、high risk 患者において術後合併症や予後に影響を与えるだけでなく、他病死との関連が示唆された。</p> <p>結論 : High risk 患者において縮小手術を行うか非外科的治療を行うかの適応を決める際に、PNI はその一助となり得るかもしれない。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 370 号	氏 名	稲富 千佳
<p>[論文題名]</p> <p>Accuracy of the Enhanced Liver Fibrosis test, and combination of the Enhanced Liver Fibrosis and non - invasive tests for the diagnosis of advanced liver fibrosis in patients with non - alcoholic fatty liver disease</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Hepatology research, volume 50, issue 6, 682-692, 2020</p> <p>著者名 Chika Inadomi, Hirokazu Takahashi, Yuji Ogawa, Satoshi Oeda, Kento Imajo, Yoshihito Kubotsu, Kenichi Tanaka, Takaomi Kessoku, Michiaki Okada, Hiroshi Isoda, Takumi Akiyama, Hideaki Fukushima, Masato Yoneda, Keizo Anzai, Shinichi Aishima, Atsushi Nakajima, Yuichiro Eguchi</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 Enhanced Liver Fibrosis (ELF) スコアは血清ヒアルロン酸、プロコラーゲンⅢアミノ酸末端ペプチド、組織メタプロテアーゼ阻害物質 1 より算出されるものであり、肝線維化診断に有用であることが知られている。本研究では、非アルコール性脂肪肝疾患 (NAFLD) の肝線維化進行例の診断における ELF の精度を評価し、FibroScan による肝硬度測定 (LSM) の診断精度と比較することを目的とした。</p> <p>【方法】 2016 年 5 月から 2019 年 1 月までの間に横浜市立大学附属病院にて肝生検で NAFLD と診断された 200 名 (training set) および、佐賀大学医学部附属病院にて肝生検で NAFLD と診断された 166 名 (validation set) に対して ELF の算出を行い、そのうち 224 名に対して LSM の測定を行った。</p> <p>【結果】 ELF の肝線維化進行例の診断における AUROC は 0.81 であり、training set では cut-off 値が 9.34 で感度=90.4%、10.83 で特異度=90.6%であり、validation set では cut-off 値が 9.34 で感度=89.8%、10.83 で特異度=85.5%であった。これは LSM の診断能と比べても有意差は認めなかった。ELF と LSM を組み合わせることで特異度が 97.9%と向上し、ELF 単独と比べて陽性的中率も向上した。さらに Fib-4 index (cut-off 値=2.67) と ELF (cut-off 値=9.34) を併用することで感度が 95.9%まで向上した。</p> <p>【考察】 ELF の肝線維化の診断能は既報と同様の結果となった。</p> <p>【結論】 ELF は NAFLD における肝線維化の進行例を識別するのに有用であり、FibroScan と同等の診断精度がある。また、ELF を他の非侵襲的検査と組み合わせることにより、肝線維化の進行例の診断能が向上することが明らかになった。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論文要旨

報告番号 甲・乙	第 371 号	氏 名	八板静香
<p>[論文題名]</p> <p>A Simple and Accurate Model for Predicting Fall Injuries in Hospitalized Patients: Insights from a Retrospective Observational Study in Japan</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Medical Science Monitor, 29, e941252, 2023</p> <p>著者名 Shizuka Yaita, Masaki Tago, Naoko E. Katsuki, Eiji Nakatani, Yoshimasa Oda, Shun Yamashita, Midori Tokushima, Yoshinori Tokushima, Hidetoshi Aihara, Motoshi Fujiwara, Shu-ichi Yamashita</p> <p>[要 旨]</p> <p>【目的】 転倒傷害が患者、医療者、医療費へ与える損害は大きい。これまでに転倒傷害予測モデルの報告はないため、本研究は入院直後に収集可能な因子を用いた成人入院患者の転倒傷害予測モデルを開発することを目的とした。</p> <p>【方法】 6年間の対象期間に急性期病院に入院した全成人患者を対象とし、単施設後向き観察研究を実施した。入院時に評価が可能な変数を、転倒による傷害があった患者群と転倒自体や転倒による傷害がなかった患者群の2群間で比較し、多変量解析で有意差のあった変数を用いて簡便な転倒障害予測モデルを構築した。</p> <p>【結果】 対象となった17062例中646例(3.8%)が転倒し、113例(0.7%)が転倒による傷害を負った。多変量解析の結果、入院中の転倒による傷害と有意に関連した変数は、年齢(P=0.001)、性別(P=0.001)、救急搬送なし(P<0.001)、紹介状あり(P=0.041)、転倒歴あり(P=0.012)、寝たきり度(すべての分類でP<0.001)の6つであった。これらの因子を用いて構築した予測モデルの同集団における曲線下面積は0.794、Shrinkage coefficientは0.955であった。</p> <p>【考察】 転倒リスクは入院直後の1週間で最も高く、かつ転倒する患者の88%は傷害を負わないという報告もあり、入院早期に転倒による傷害を負う患者を予測できる本モデルは、転倒による傷害の予防に非常に有効と考える。</p> <p>【結論】 入院時に収集可能な6つの因子で構成される簡便な転倒傷害予測モデルを開発した。本モデルは内部検証で良好な識別能を示し、多忙な臨床現場で有用なツールとなりうる。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。

論 文 要 旨

報告番号 甲・乙	第 372 号	氏 名	井手俊宏
<p>[論文題名]</p> <p>Associations for Progression of Cerebral Small Vessel Disease Burden in Healthy Adults: The Kashima Scan Study (健康成人における脳小血管病の進展因子を解明する縦断的コホート研究)</p> <p>雑誌名, 巻 (号のみの雑誌は号), 頁一頁, 発行西暦年 Hypertens Res. doi: 10.1038/s41440-023-01419-3. Epub ahead of print. PMID: 37673959. 2023.</p> <p>著者名 井手俊宏、薬師寺祐介、鈴山耕平、西原正志、江里口誠、緒方敦之、松本明子、原めぐみ、原英夫</p> <p>[要 旨]</p> <p>目的: 中年成人を中心とした神経学的に健康なコホート (n=665、平均 57.7 歳) を対象に、血管危険因子と脳小血管病 (SVD) の進展との関連を縦断的に検討した。</p> <p>方法: 脳ドック受診時のベースライン MRI と、ベースラインから少なくとも 1 年以降のフォローアップ MRI の両方を有する被験者を対象とし、ラクナ、微小出血、白質病変、血管周囲腔拡大を含む SVD の特徴の有無を合計し、total SVD score を算出した (0~4)。SVD の進展はベースラインと比較して追跡調査時に 1 ポイント以上増加した場合と定義した。主要解析として多変量ロジスティック回帰分析を行い、ベースライン時の臨床所見と SVD 進展との関連を検討した。</p> <p>結果: 追跡期間の中央値は 7.3 年で、154 例 (23.2%) で SVD の進展が観察された。SVD の進展は年齢 (10 歳増加あたり、OR: 2.08、95%CI: 1.62-2.67)、高血圧 (OR: 1.55、95%CI 1.05-2.29)、収縮期血圧 (標準偏差 [SD] 増加あたり、OR 1.27、95%CI 1.04-1.54)、拡張期血圧 (SD 増加あたり、OR 1.23、95%CI 1.01-1.50)、平均動脈圧 (SD 増加あたり、OR 1.27、95%CI 1.04-1.55) と関連していた。</p> <p>考察・結論: 年齢と高血圧は中年期以降の脳小血管負荷の進行に重要な役割を果たしている。</p>			

備考 1 論文要旨は、600字以内にまとめるものとする。

2 論文要旨は、研究の目的、方法、結果、考察、結論の順にタイプ等で印字すること。